

# 音 楽 科

徳 田 典 子  
本 多 春 奈

## 1 音楽科における「よりよい未来を志向する子」

私たちは、日常生活の様々な場面で音や音楽にふれる機会をもっている。そして、音楽は私たちの感性を刺激し、生活に豊かさや潤いを与えてくれている。学校教育における音楽科でも、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わったりする力を育成することを大切に、生涯にわたって音楽文化に親しむための素地を養ってきた。

新学習指導要領では、音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力」と明示している。つまり、「生活や社会の中での音や音楽の役割と自分とのかかわり」「学んできたことと生活や社会の中の音や音楽とのつながり」、この点において子どもが興味・関心をもって探求できるような指導が求められている。

そこで、本校音楽科では音楽に豊かにかかわっていくために「音楽的な見方・考え方」を意識しながら音楽に向き合うことを大切にする。音楽を一方的な見方や感じ方でとらえるのではなく、その中にある様々な要素や仕組みを聴き取ったり感じ取ったりし、それらが音楽に与える効果や影響について理解できるようにする。そして、表現や音楽づくりの場での工夫につなげていく。また、学校での学びだけではなく、生活や社会の音や音楽とも結び付けることで、さらに豊かな音楽とのかかわり方ができる子どもの育成をめざしていく。

以上のことから、音楽科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえた。

- ・音や音楽に目を向け そのはたらきについて気付こうとして学習を積み重ねていく子
- ・音や音楽を通して 通じ合い 響き合い 共に創り合う体験から 自分の表現方法を明らかにしていく子
- ・今までの学習を生かして 生活や社会の音や音楽と豊かにかかわっていく子

## 2 音楽科における未来へ生かす決める授業デザイン

音楽科の授業で子どもは様々な音や音楽にふれ、自分たちの音楽の幅を広げていく。表現(歌唱・器楽・音楽づくり)、鑑賞の領域において、思考・判断・表現する一連の過程を大切にした学習や毎時間のふりかえりを充実させていくことで、子どもはどんな力がついてきたかを実感し、次の学びにつなげていくことができる。

まず、導入では子どもの音楽に対する興味・関心を引き出すために題材や学習材との出会いを工夫し、題材に期待感をもたせることで、意欲が持続していくようにする。学習の中で、子どもは様々な楽曲を通して音楽的要素と音楽との関係について学び、主体的に音楽を表現したり、鑑賞したりする経験を積み重ねる。さらに、個のふりかえりを通して自身の学びを確認、蓄積していくことによって、多種多様な音楽に出会ったとき音楽がもっているよさに気付くことができるようにする。

次の段階では個人での思考や表現だけではなくペアやグループでの協働を大切に、新しい気付きや音楽の見方にふれる経験を積み重ねる。そして、音楽に対する考え方を広げ、感性豊かに表現する姿をめざしていく。グループで音楽表現を練り上げていく過程では、「前の時間ではこんな表現が見つかったよ」「この音をつかうと思いが伝わる」など、各々の考えを伝え合い、一つの音楽にまとめていく。子どもは全体でのふりかえりを基に様々な考えや表現方法を伝え合い、それを試していくことによって、自分たちの思いに合った表現方法を明らかにしていく。

題材の終末では、自分の学びをふり返り次の学びにつなげていくための省察を行う。音楽科では、生涯にわたって音楽に親しんでいくために、音楽に積極的にかかわり、豊かな感性で音楽に向き合おうとする姿をめざしている。そのために、省察を通してこれまでに学んだことや自分について、今後取り組みたいことなどを確認することにより、次の学びへの意欲をもたせる。子どもの音や音楽への興味・関心が高まることで、様々な音楽とのかかわり方を決める

ことができるようになり、生活や社会の中の多様な音楽への関心を高めることにもつながっていく。そして、普段なら聴き流してしまうような音楽に対しても、立ち止まって耳を傾けようとする豊かな音楽性を育むことができる。このような学びを積み重ねることで、子どもの感性や音楽性は豊かなものとなり、学校のみならず、自分たちの生活や社会の音や音楽への興味・関心へと広がっていく。そして、子どもが生涯にわたって音楽に親しんでいくための素地となっていく。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

新しい教材との出会いは、子どもにとって学びの第一歩である。子どもの意欲や学びへの原動力を喚起するきっかけとして、教材となる楽曲や学習材との出会いを大切にす。そして、これまでに聴いたことのない音や音楽に出会うことで感性を刺激し、「面白そうだ」「演奏してみたい」といった意欲につなげていきたい。

初めての教材や学習材に向き合う子どもは期待感に満ち、音楽との向き合い方や、アプローチの仕方、表現方法や題材に対し意欲をもって臨んでいる。子どもと教材との出会いの場が、学習全体の見通しをもつための場となるよう意識し、子どもが、この題材の終わりに「どんな力がつくか」「どんな表現ができるようになるか」などの自分の姿を想像することができる導入を行う。そのために教材の内容を吟味し、この題材を通してどんな表現をめざし、どんな力を付けていくのかを明らかにする。そして、様々な楽曲や学習材を通して、音楽的要素が楽曲に与える効果や影響について学ぶ経験を積み重ねる。このような学びの中で、子どもは自分で選択し、自分の思いを音にしたり、友達と協働して音を音楽に構成したりする経験を重ね、豊かな感性を育むことができると考える。加えて、ふりかえりを通して学びを蓄積していくことでより豊かな音楽表現につなげていく。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

多様な視点から課題を追求していくために、ペアやグループ活動を適宜取り入れていくことを大切にす。そして、ペア・グループ活動を通して一人一人が思いを伝え合い、考えを広げ、豊かな表現につなげていくことができるようにする。さらに、子どもが協働して学びを深めていくために、工夫の視点を絞るなどの条件設定をする。「反復」をつかう、「強弱」を変化させる等、視点をはっきりさせることで工夫の内容が明確になり、思いや意図を伝え合いながら、つくり上げたものをふくらませたり練り上げたりしていくことができる。

多様な学習形態の中で課題を追求・検討し、子どもが様々な発想を働かせながら音楽に取り組んだり、個人やグループでのふりかえりを通して学びを実感したりする経験を重ね、共につくり上げる喜びを感じられるようにする。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

音楽科では、記述などのふりかえりを通して個人やクラスの学びを再確認し、得たことを実際に音に表すまでの過程を大切にす。

ふりかえりはこれまでの自分の学びを確認し、次の学びにつなげていくためのものである。題材を通して自分の音楽がどのように変容してきたか、どんな力がついてきたか、次の題材でもっと伸ばしていきたいことは何かなど、ふりかえりを通して学びがつながっていくような意識をもたせる。また、ふりかえりの視点を明確にすることで自己の変容と自身の成長を実感させ、意欲につなげていくことができるようにする。

個人でのふりかえりだけでなく、グループ活動やディスカッションを通して、個のふりかえりを全体の場で共有したり広げたりする場をもたせる。様々な考えを共有することで幅広い見方や考え方を養うことができ、豊かな音楽的感性の育成につながっていく。

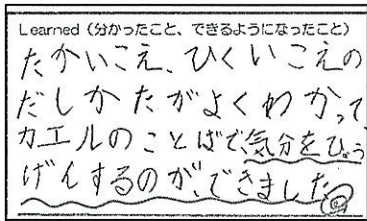
さらに、題材のまとめとして省察を行うことで自分の学びの履歴を再確認し、今後の音楽とのかかわり方を見つめ直すことができる。このふりかえりや省察の積み重ねが音や音楽に積極的にかかわろうとする姿を育み、生活や社会の音や音楽に豊かにかかわっていく子どもの育成につながっていくと考える。

## 4 実践例

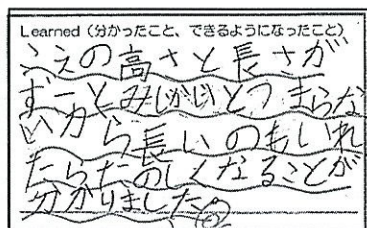
未来へ生かす決めるを促す授業デザイン～ふりかえり・省察から見えてきたこと～

### ① 2年「音の高さのちがいをかんじとろう～かえるの音楽をつくろう～」の実践

本題材は表現（かえるのがっしょう）、音楽づくり（かえるの音楽づくり）、鑑賞（松田昌作曲「かえるのがっしょう」）、各領域の学習を通して、「音の高さ」について学びを深めていく題材となっている。題材を通してふりかえりを積み重ねていくことで、その時間の学びを確認するだけでなく、次時の学びにもつなげていくことをねらい、題材の構成を考えた。授業の終わりに、「分かったこと」「友達の見解でよいと思ったこと」「これからやってみたいこと、感じたこと」の三つの点で記述によるふりかえりを行い、題材の終末には、「この学習を通してどんな力がついたか」「ついた力をどのように生かしていくことができるか」「今後、どのようなことを学んでいきたいか」、この三つの点について省察を行った。第1次では「か



資料1 子どものふりかえり

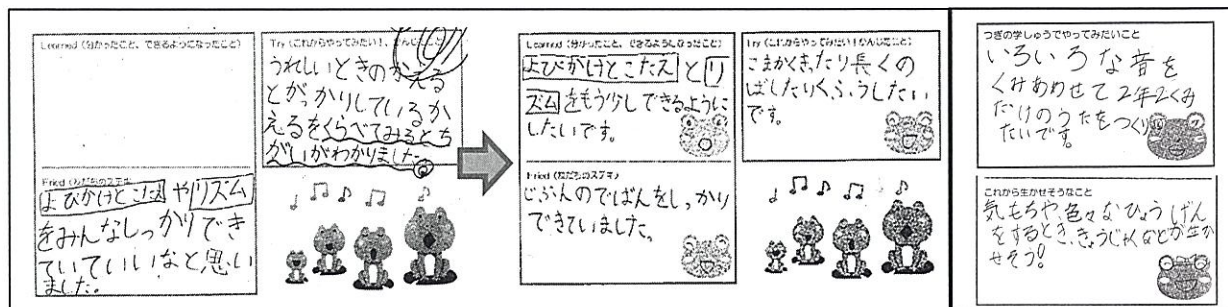


資料3 他のグループ演奏  
からの気づきの記述

えるの声あそび」に取り組んだ。この活動は「音の高さ」を意識する上で効果的であり、声あそびを通して子どもは「小さいかえるは高くて小さい声」、「大きなかえるは低くて大きい声」のように、かえるの大きさによって声の高さなどを工夫し、鳴き声を表現していた。子どものふりかえりからも、かえるの声あそびで「音の高さ」を意識していたことがうかがえた（資料1）。この経験が、第3次の音楽づくりでも生かされ、お話に合わせて音を組み合わせる活動にスムーズにつながった。続く第2次では「かえるのがっしょう」に取り組んだ。この曲は子どもたちにとって馴染みのある楽曲であり、楽しく歌ったり、輪唱したりする様子が見られた。この歌唱の学習で再度「音の高さ」を意識させ、次時につなげた。第3次では音楽づくりに取り組んだ。この学習では、高さの違う三つの音をかえるの鳴き声に見立て、その音を組み合わせることで大中小3匹のかえるの様子を音楽に表した。2年生にとって本題材は初めての本格的な音楽づくりの学習であったため、抵抗感を感じさせないために段階を踏んで学習を進めた。まず、子どもたちがイメージを十分に膨らますことができるよう、グループでどんなお話の音楽にするかを考え、3匹のかえるがどんなおしゃべりをしているか、どんな気持ちなのか話し合わせた。さらに、音楽づくりで活用する「音の重なり」「音の高さ」「強弱」などの音楽の仕組みについて、全体での即興演奏を通して理解を促し、自分達の演奏でも活用できるようにした（資料2）。加えて、グループ活動の中でよい工夫があれば、紹介していくことで価値付け、全体に広めるようにした。実際に音を重ねたり、呼びかけと答えで演奏したりする活動を積み重ねていくことで、子どもは音楽の仕組みをどのようにつかっていくか試行錯誤を重ね、理解を深めることができた。子どものふりかえりからは、「呼びかけと答えで音楽をつくることができた」「友達の工夫をためすと、いい音楽になった」等、グループ交流を通して音楽をつくっていく姿を見取ることができた。また、他のグループの演奏を聴いて、音を変化させると曲の様子が変わること気付いている記述も見られた（資料3）。

本題材では、適宜ふりかえりを行うことで学びを積み重ねていくようにした。ただ、2年生にとって記述によるふりかえりでは、自分の思いをうまく表現することが難しい子どももおり、3つの観点全てを時間内に書くことができない様子も度々見られた。そこで、ふりかえりシートには記述欄だけでなくかえるの顔を画し、表情を描き入れることで自分の思いを表現することができるように工夫した。シートの形態を変えたところ、文章と表情の両方をつかって自分の思いを表す様子が見られた（資料4）。このことから、発達段階に応じたワー

クシートの工夫が効果的であったと言える。ただ、表情がどんな思いを表しているのかを子どもから聞き取らなかつたため、記述の根拠となる思いを把握することができなかつた。なぜこの表情なのか、表情が前と比べて変わったのはどうしてか、子どもの思いを引き出したリ、広めていったりすることでふりかえりの記述がさらに充実したものになったと考える。



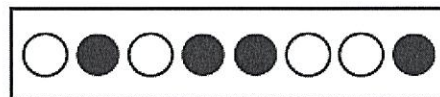
資料4 ふりかえりシートの変容のようすと省察シート例

省察では「できるようになったこと」「これから生かせそうなこと」「つぎの学習でやってみたいこと」の3つの観点で題材のふりかえりをした。省察の中には、次はこんな学習がしたい、これからの学習で～が生かせそう、と見通しをもった省察ができていた子どもの様子も見られた(資料4)。ただ、2年生にとってこの題材で学んだことを次のどの学習に生かすことができそうか、見通しをもたせることが難しかった。加えて、省察の内容も難しかったことから記述に戸惑う姿も見られた。発達段階に合わせて文言を考えたり、書き方の工夫をしたりすることや、よい記述を取り上げ、その考えや見方を価値付け、全体に広めたりするなどの手立てが必要であった。また、省察を行うタイミングにも配慮し、機会をとらえて省察を行うことも効果的な省察を行うために大切だと感じた。題材の終末だけでなく、次の新しい題材に出会った際に省察を行うことで、前題材の学びを再確認し、本題材の学びの見通しをもつことにつながっていくと考える。2学期以降の題材に見通しをもち、効果的なふりかえりや省察を行っていききたい。

## ②6年「楽器や声による世界の国々の音楽～インターロッキングの音楽を知ろう～」の実践

本題材では、インターロッキングの音楽の仕組みによってつくられている楽器や声による世界の国々の音楽を取り上げて鑑賞活動をした。ここでは、鑑賞の活動に必要な音楽の仕組みをより理解させる体験や器楽表現の活動を取り入れることでインターロッキングの音楽の仕組みの理解を深めたいと考えた。また、ふりかえりは毎時間の終末に実施し、省察は題材を終えて記述させる形をとった。ふりかえりシートには、授業のまとめを受け、その時間の学習を客観的に振り返ることができるように、必ず学習課題を記入させてから学習のふりかえりを実施した。

第1次では、インターロッキングの音楽の仕組みでつくられている、声による音楽であるインドネシアの「ケチャ」に出会わせた。主従に分かれているのが特徴であるインターロッキングの音楽の仕組みでは、主奏者○が演奏するリズムパターンに対して従奏者●が入れ子になる補充的パターンを演奏する。その音楽の仕組みをより理解させるためには、○や●のような絵譜(資料5)を使って、リズムパターンを自分で考えさせて声や手拍子で表現する活動を取り入れた。絵譜を使うことで簡単に自分の考えが可視化され、友達と演奏することが出来た。その上でインドネシアの「ケチャ」の鑑賞をさせることにした。この活動を終えたA児のふりかえり(資料6)によると、この音楽がもたらす独特な響きは、インターロッキングリズムが入れ子になっているからだとして理解している。だが、「思っていたよりも人数が多くて、動きが激しかったのでびっくりしました」のB児のように、映像の様子そのものに印象が色濃く残ったふりか



資料5 インターロッキングの音楽の仕組みを可視化したワークシート

〈インターロッキングの音楽にはどのような特徴があるのか〉

L(わかったこと)

インターロッキングの仕組みを知ったうえでインドネシアの「ケチャ」を聞いたら、声だけであれだけの音楽が表現されていたのでびっくりした。また音楽の仕組みや国が違うだけで、独特な音楽を生み出していることが不思議に思った。

資料6 A児のふりかえり

えりもあった。そこで、この時間の学びの深まりは弱かったと判断し、再度インターロッキングリズムの特徴をしっかりと捉えさせるために次時に再度鑑賞の活動をした。ここではCDによる聴き取りを実施し、入れ子によるインターロッキングリズムがよく理解できる部分を選んで聴き取らせた。聴き取り後のB児のふりかえりでは、「声だけでインターロッキングの仕組みを使ってあれほどのおもしろいリズムがつくれているとすごかった」とあり、この音楽の仕組みが理解できたようであった。



資料7 インターロッキングの音楽の仕組みを実感する姿

ぼくは、この曲を聴いて一つのリズムを1拍ずつずらしていくと音楽になるんだなあと思いました。ガムランでは表裏の演奏をしていたけど、ずらすだけの演奏なのにとっても現代的な音楽だと感じました。この音楽をつくったライヒさんはすごいです。音が二人で重なったり、ずれていたり…組み合わせの規則性がありそうでなくておもしろかったです。身近にできるクラッピング(手拍子)がこんなにすごい音楽になっていておどろきました。

資料8 D児のふりかえり

グの音楽の仕組みを生かした演奏法のあり方が実感できた。

第3次では、様々な国のインターロッキングの音楽を鑑賞させた。特に、ライヒ作曲「クラッピング・ミュージック」では、今まで鑑賞したインターロッキングの楽曲の鑑賞を想起し、イメージの違いに興味深く鑑賞すると予想していた。ここでは自由記述できるふりかえりシートを使うことでこれまで学習して得たことをもとに、学びの深まりや広がりを確認したいと考えた。D児のふりかえり(資料8)によると、既習したインターロッキングの音楽とはどのような特徴があるかは理解している。その上でこの楽曲はインターロッキングの仕組みを使ってはいるが、音のずれによって構成されていることにも気付いている。また、音素材が手拍子でありながら二人の奏者の拍のずれ方の巧みさから醸し出される曲の気分をインドネシアの音楽と比べて、現代的であると感受している。この題材の終末に省察を実施した。A児の省察シートによると、1では、その鑑賞曲を通して曲想を生み出しているインターロッキングの音楽の構造に目を向けて鑑賞しているのが伝わる。2では、鑑賞の活動に器楽教材を取り入れたことで、さらに音楽の構造が理解できるようになった。3では、これまで鑑賞の学習で学んだ知識をもとに実際に演奏することでその音楽の難しさやよさを実感している(資料9)。本題材を通して子どものふりかえりからは、これまでの学習でわかったことを確認するという記述が多かった。また、器楽の活動のように自らが表現したことは、実感が伴った思いや考えが記述されその時間ごとに学習で学んだことが更新されていた。題材の終末に実施した省察としては、音楽の仕組みという知識をもとに器楽を経験させたことで、それまでの学びが往還されていることが記述からみられた。また、それまでの学びをふり返って省察させることで、題材を通して経験したことの意味づけをより確かなものにしていく。

第2次では、インドネシアの「ガムラン」を鑑賞させた。ここでは、鑑賞するだけでなくバリ島のガムラン音楽「ギリッ」を合奏させる活動を取り入れることで、インターロッキングの音楽の仕組みによる特徴をより実感させることにした。初めて演奏体験をした後のC児の振り返りによると「ポロスとサンシの部分によるインターロッキングリズムのかみ合わせが上手く演奏できなかった。どうしたらバリのガムランの演奏みたいにできるかがわからない」とあった。次時は学習課題を「音が一つになって流れ出すにはどのようなことに気をつけて演奏しなくてはならないのか」としたことで、実際に音が一つなるためにはどのような演奏に心がけたらよいのかを合奏の活動の中で話し合わせた。また、範奏と子どもの演奏を聴き比べる機会を設定することで、自分たちの演奏との違いに気付き、再構成の演奏をくりかえすことを期待した。子どもは器楽演奏する中で徐々に音が一つになって流れ出してきた時、インターロッキングの音楽の仕組みによってできていることを実感していた(資料7)。D児のふりかえりによると「相手の手の動きを気にしながら、横に並ぶことや向かい合って演奏したほうがいとわかった」とあった。また、E児は「相手を見て演奏したら、音が一つになっていくことがわかった」とあることから、子どもにとっては鑑賞と器楽による表現の活動が往還することで、インターロッキング

1. 題材のはじめとおわりをくらべて、できる(わかる)ようになったことは何ですか。  
はじめに、「ケチャ」を聴いて、インターロッキングの音楽はどのようなものかを知った。多くの人の声がかみ合わさって、重なり合って音楽を作り出していた。「ギラッ」を実際に演奏して、インターロッキングの難しさと奥深さを感じた。「クラッピング・ミュージック」を聴くとインターロッキングは伝統的な感じから、かっこいい現代的な音楽もあることを知った。
2. これから この学習をどのように生かせようですか。  
これから、様々な音楽を聴くとき「この曲のここがインターロッキングかな？」みたいに音の重なりが少しわかるようになったので生かせようだ。
3. この学習をもとに、次はどのようなことを学びたいですか。  
映像で見るのと実際にやってみるのではだいぶちがうことを知った。本格的な演奏が見たいし、実際にやってみたい。これからはいろいろな音楽に挑戦してみたいと思った。

資料9 A児の省察シート

## 5 成果と課題

### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」学びへの原動力を形成する「決める」

低学年では音楽づくりの経験が少ないことから、題材の導入に省察による既習のふりかえりを行うことは難しかった。そこで、毎時間のふりかえりを積み重ねていくことで学びの足跡を実感し、題材を通してわかったことやできるようになったことを定着させていくよう意識させた。ふりかえりを効果的に行ったり、題材構成を工夫したりすることで子どもの学びへの意欲は題材を通して継続していったように感じた。今後は、ふりかえり・省察の経験を積み重ねていくことで、より効果的な省察を行うことができるようにしたい。高学年では、鑑賞領域を器楽表現を含めた大きなとらえで行ったため、既習となる学びがなく導入時に省察を行うことができなかった。ただ、鑑賞、表現の各領域を通して音楽の要素から学習内容を束ねていくことで、子どもに学ぶ必要感や目的意識をもたせることができた。鑑賞活動での気づきを器楽表現で実際に体験することで理解を深め、子どもは音楽の仕組みについて実感を伴いながら学ぶことができた。また、高学年では2学年のまとまりで学習内容が構成されているため、本題材を貫く学習内容が、前単元でも行われていたのか、または、前の学年ではどうだったかを見極めることが省察を行う上で大切である。今後は、題材の学習内容に必要な省察を行うことで、子どもの学びをつなげていきたい。

### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

低学年では、グループでその時間のふりかえりをした後に、個人のふりかえりの記述を行った。交流を通してふりかえりを行うことで、友だちとのかかわりの中から得た表現や気づきについて再構成することができていた。また、友達と試行錯誤しながら音楽に向き合ったり、他のグループの考えを試したりすることで「音をだんだん増やすと、楽しい感じになる」「強弱の変化で気持ちが伝わる」といったように、新しい表現に気付く姿も見られた。交流を通して表現の幅も広がり、表現と音楽の仕組みをつなぐ「音楽の見方、考え方」も豊かになっていった。高学年では、鑑賞活動での気づきを実際に器楽表現で体験し、グループで演奏時の問題点を共有することでガムラン音楽の表現の面白さを実感する姿が見られた。多様な視点から演奏を見つめ、交流することで音楽の仕組みへの理解を深めることができた。

### (3) 今までの学びをふり返り未来に役立てる「決める」

低学年ではイラストで感情を表出することのできるふりかえりシートを用いたことで、楽しみながら学びを蓄積していくことができた。さらに、毎時間のふりかえりを積み重ねていくことで、その時間の学びの足跡を実感し題材を通して分かったことやできるようになったことが定着した。その積み重ねが記述の充実と中身の変容にもつながった。また、省察については、既習を想起させて学びをつなげていくためにも、同じ領域の学習の導入で行う必要があると感じた。新しい題材に出会ったときに見通しをもった学びができるよう、ふりかえりや省察を積み重ねていきたい。高学年では、省察を行う場合に各領域の積み重ねを意識する必要があると感じた。2学年を通した大きな括りで学習を進めていくため、前題材の既習がもとになる題材もあれば前学年の既習がもとになる題材もある。学年間の学びの系統性や題材の組み立てを考慮しながら効果的な省察を行い、子どもの学びにつなげていきたい。